



自然あそびの場を通じて
子どもたちに気付きと学びを
前田敦司さん(32歳)日高町名色



山陰海岸ジオパークのど真ん中に位置する神鍋高原で、四季折々の「自然あそびの場」を提供しているのが、前田敦司さんです。

前田さんは、平成23年に東京からUターン。独立を前提に山陰海岸ジオパークのガイドを2年間務め、自然学習と出会いました。「ガイドをする団体を立ち上げた」ものではないと、自然体験をしながらジオパークの良さを伝える「NPO法人かなべ自然学校」を立ち上げました。

「自然学校という名前だけでなく『教える』より『気付き』を大事にしている」「気付きの機会として、時間と空間を作り、自分で気付き学ぶような声掛けをする。でも、教えたくはない」と前田さんは話します。ヒントと答えのラインの見極めは難しく、大切です。

自分の生き方、理想、やりたいことを求めて実現している前田さん。「求めないとかなわない。求めたらかなう」。自身が信じるこの言葉を、みんなに伝えたいと力強く語ります。

Toyooka Topics —とよおかの“旬”な人と話題—



▲一列に並んでゾンデ棒を使用した搜索訓練

冬山遭難救助訓練

遭難救助の向上と関係機関の素早い連携

2月4日、旧名色スキー場で、豊岡市日高消防団、豊岡南警察署、豊岡消防署の合同による「冬山遭難救助訓練」が行われました。

参加者は、消防署の指揮の下、実際に消防隊員が雪の中に埋まった人を検索するゾンデ棒をズボッ、ズボッ、ズボッ。棒が人に当たる感触を全員で確認しました。その後、雪崩が発生したことを想定しゲレンデ中腹までの雪上歩行。事前に埋設した人形を棒で検索し、要救助者を的確に掘り出す訓練などを行いました。

日高消防団長の岡本 孝さんは「災害はいつ起こるか分からない。3者が合同で訓練することに意義がある」と話し、万が一の遭難に備えました。

港かるた大会

子どもたちのふるさと教育にも活用

2月5日、港地区公民館で、第7回港かるた大会が開催され、園児から高齢者まで延べ160人以上が参加しました。

大会では、個人戦、団体戦、地区対抗戦が行われ、取った札の枚数を競いました。港かるたは地域の歴史や文化、自然を題材にしたもので、地区住民が平成22年に制作。取り札は片面が切り絵による「絵札」、もう片面が読み札の句を書にした「字札」できています。また、読み札の片面には地区の歴史等の解説があり、子どもたちのふるさと教育にも活用されています。

大坪爽世ちゃん(6歳)は「絵札が好き!」と身を乗り出して取り札を探していました。



▲世代を超えた熱戦



「広報とよおか」は、環境に優しいベジタブルインキで印刷しています。